



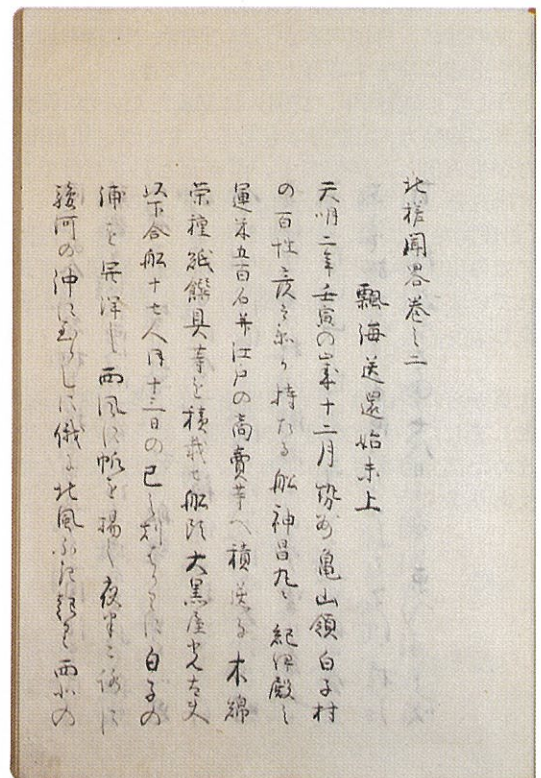
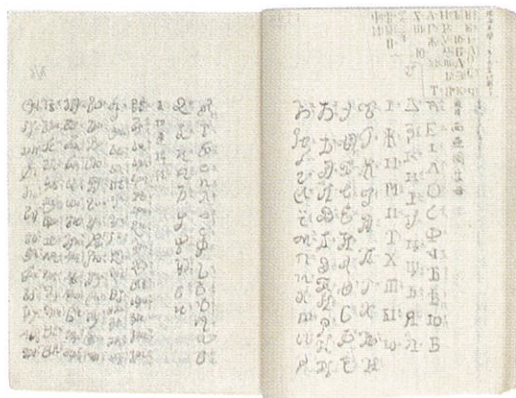
ダイ・コー

大黒屋光太夫記念館だより



2016年10月

漂流ミュージアム 大黒屋光太夫記念館



「北槎聞略」 鈴鹿市蔵 江戸時代後期
左：全体／上：卷之二 飄海送還始末 冒頭

企画展

ほく さ ぶんりやく

『北榎聞略』でたどる光太夫の旅

「北榎聞略でたどる 光太夫の旅」として展示替えを行いました。

蘭学者・桂川甫周の編さんした「北榎聞略」は、光太夫の漂流記としてだけでなく、江戸時代のロシア研究書としてもとても有名な書物ですが、全12巻のうち、2・3巻は「飄海送還始末」といって、光太夫が漂流してから帰国するまでの出来事が綴られています。今回の展示では、この「飄海送還始末」に沿って、光太夫の足跡を追う内容になっています。

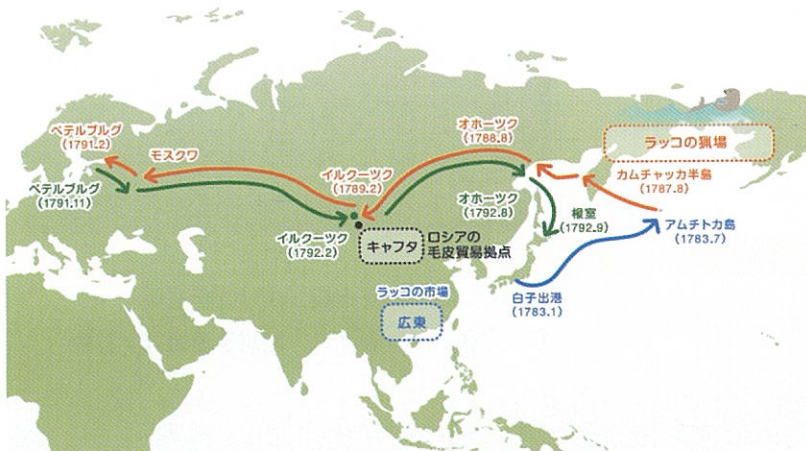
帰国して江戸に着いた大黒屋光太夫は、桂川甫周^{かつらがわほしゅう}という人物に出会います。甫周は、幕府のおかかえ医師で、優秀な蘭学者でした。ロシアから帰国した大黒屋光太夫についての本格的な調査を、甫周は幕府から命じられたのでした。

幕府の命を受けた桂川甫周は、光太夫から丹念に聞き取り調査をおこなうことにしました。さらに、甫周は、光太夫の話が鵜呑みにはせず、長崎から輸入されたオランダ語の地理学書『ゼオガラヒ』を読んで、その内容と光太夫の話とを照らし合わせることにしました。光太夫の話に、外国の本から得た知識で考察を加えて、ロシアという国を正確に理解する努力をしたのです。

そうして、寛政6年（1794）に完成したのが『北榎聞略』でした。光太夫の観察力・記憶力はもちろんですが、桂川甫周の学識と情熱・努力が生み出した傑作です。漂流記としてだけでなく江戸時代のロシア研究書としても高い評価を得ています。

『北榎聞略』には、光太夫が漂流してから、約10年間にわたるロシアでの出来事のほか、ロシアの地理・歴史・産業・風俗などが書かれています。この『北榎聞略』を片手に、光太夫の旅をたどってみましょう。

* 次頁からの解説は、『北榎聞略』2・3巻（飄海送還始末）をもとに作成しました。原文の趣を極力残すよう努めました^が、現代の言葉に改めた部分もあります。また、原文は長文のため省略した部分も多々あります。



大黒屋光太夫 略年表

宝暦元年 (1751)	大黒屋光太夫、生まれる
天明2年 (1782)	神昌丸、難船
天明3年 (1783)	7ヶ月漂流 アムチトカ島に漂着 ロシア語を覚える
天明7年 (1787)	カムチャッカ半島へ渡る
天明8年 (1788)	オホーツク、ヤクーツクへと移動
寛政元年 (1789)	イルクーツク着 庄蔵片足切断
寛政2年 (1790)	キリル・ラクスマンと出会う
寛政3年 (1791)	ペテルブルグへ上京 エカテリーナⅡ世に拝謁 帰国の許可を得る
寛政4年 (1792)	イルクーツクで新蔵・庄蔵と別離 光太夫・磯吉・小市の3名オホーツク出帆 根室入港（ラクスマンの来航）
寛政5年 (1793)	根室で小市病死 松前で日露会談が開かれる 光太夫・磯吉江戸に送られる 江戸城で徳川家斉に上覧を受ける
寛政6年 (1794)	芝蘭堂に招かれる 北榎聞略成立する
寛政10年 (1798)	磯吉が鈴鹿に帰郷
享和2年 (1802)	光太夫が鈴鹿に帰郷
文化6年 (1809)	桂川甫周没
文政11年 (1828)	光太夫没

『北槎聞略』2・3巻（飄海送還始末）より

漂流

天明2年壬寅の年（1783年）12月13日巳の刻（午前10時頃）、神昌丸に紀州藩の米500石や江戸の商人へ送る木綿・葉・紙・漆器などを積み、船頭の大黒屋光太夫以下17人は、白子浦を出帆した。

駿河の沖に至った時、にわかには北風が吹き、西北の風との嵐になってたちまち船は楫を砕かれ、転覆寸前。船中の者はみな、もとどりを切って船魂（船の守護神）に供え、命かぎりに働いたが、風は強まるばかりだった。明け方には、荒れ狂う波の音は雷の激震のようで、波の勢いは山が崩れるかと思うほどとなり、ついには、船の帆柱を切り倒し、上荷物を捨てて、なんとか嵐を凌いだ。

それから7・8日間、船は東へと流され、その後は風浪にまかせて海上を漂った。彼岸のころには、風も穏やかになり、暈表や着物を綴って帆にして船を走らせたが、一向に陸は見えない。3月に入った頃には、碇も失い、いつの間にか船底には2尺（約60cm）余りも海水が入ってきていた。

船には米が積んであったので食料には困らなかったが、飲み水には苦勞した。水桶には鍵をかけて、光太夫が配分をきめて割り当てたが、やがてそれも尽き、雨水を貯めてもすぐに飲み尽くした。苦しさの余り海水を飲もうとしても飲めるものではなかった。

アムチトカ島

5月になっても、雪が降る日があった。7月15日には、幾八が死んだ。遺体は清めて、海に沈めた。そして、7月19日、昆布を見つけたので陸が近いことを知る。翌日の暁には、磯吉が島のようなものを見つけ、日が昇って櫓に登った小市が鳥影を発見した。

その島は木も生えていない小島だった。上陸すると、長髪で短い髭をはやした赤黒い肌の島人（アリュート人）が近寄って来た。さらに、容貌の異なる羅紗装束を着た者（ロシア人）が4・5人、空鉄砲を撃ちながら現れ、一人が烟草を粉にしたもの（嗅煙草）を差し出した。彼は、ニビヂモフと言うロシア人の頭で、毛皮交易のためこの地に来ていた。ロシア人は、この島で島人が獲るラッコ・アザラシ・トドなどを木綿や煙草などと交換し、5年ごとにロシア本国からやってくる迎いの船に積んで帰るのだ。

その日は、海岸の岩穴で眠り、翌朝、起き出て浜辺を見たところ、神昌丸は暗礁に触れて船底は壊れ、荷物は流されてしまっていた。ニビヂモフは、病気の三五郎たちを島人に背負わせ、光太夫たちをロシア人の家で保護した。しかし、8月9日の朝、磯吉の父の三五郎が亡くなり、その後作二郎、長次郎、藤助が次々に病死した。残った者たちは日増しに心細くなったが、命さえあるのならば、神仏の御加護でふたたび日本に帰るべき道もあるはずだと思い、ロシアからやってくるという迎いの船を待ち暮らした。

ロシア語

アムチトカ島に着いて半年あまり経っても、ロシア人とは言葉が通じなかった。そんなある日、ロシア人たちが、時々、光太夫たちの衣類などを見て、「エト・チョウ」と言うことに気がついた。しかし、それが「欲しい」という意味か、「良い」とか「悪い」とか言いたいのか、わからない。

磯吉は、こちらからも言ってみれば分かるかもしれないと思い、鍋を指さして「エト・チョウ」と言ってみた。するとロシア人は、「コチョウ」と答えた。その時、磯吉は、「エト・チョウ」とは、ロシア語で『これは何ですか』という意味だと気がついた。それからは、「エト・チョウ」と質問し、書き留めているうちに、ロシア語をずいぶん覚え、少しずつ会話もできるようになった。そして、いたずらに月日を送るよりはと、島人にまじって周辺の島々に渡り、ラッコを捕る手伝いをするようになった。

それから3年が過ぎ、ついにロシアから迎いの船が来たが、接岸しようとして大破してしまった。悲嘆に暮れていると、ニビヂモフが、船を造ることを提案した。光太夫たちは、ロシア船や神昌丸の部材・流木等を集め、1年かけて600石積ほどの船を建造した。これにロシア人25人と光太夫たち9人が乗り組み、ラッコ・アザラシ・トドの皮・干魚・干雁などを積み入れて、1787年7月18日、アムチトカ島を出帆し、カムチャッカ半島へと脱出した。

カムチャッカ

カムチャッカでは、光太夫たちは長官と書記の家に住まわされた。夜は、チュブチャという干魚、白い汁（牛乳）にタワラという実を入れた食事に、熊手のようなもの（フォーク）・小刀（ナイフ）・大さじ（スプーン）が添えて出された。朝は麦の焼餅（パン）と夜と同じ汁を与えられた。その汁は甘美だったが、牛の腹の下でその汁を搾るのを見てからは、誰もその汁を飲まなくなった。

郡官から支給される麦粉・魚・肉のうち、肉は断っていた。しかし、11月頃から町が飢饉に襲われ、食物の支給は途絶え、麦はもちろん魚も食べつくした。ある日、郡官の部下が牛の股肉2つを持ってきて、食べるよう説得した。磯吉が最初に食べ、他の者もそれに続いた。その肉で8人が2ヶ月ほど命をつないだが、しだいに弱って歩行も困難になり、ついには桜の木の甘皮を水にひたして食べたりもした。この飢饉の中、与惣松・勘太郎・藤蔵が股から足まで青黒く腫れ、歯茎が腐って死ぬチンカ（壊血病）という病気で亡くなった。翌年5月になって川の水が解けると、バキリチイという小魚が大量にさかのぼってきたので、命をつなぐことができた。

6月には、海軍大尉が、カムチャッカ半島の西岸に赴くの同行し、川を遡り、山道を越え、7月1日にチギリという町に着いた。

さらに、光太夫たちはチギリを發って対岸のオホーツクに渡った。



石井研堂『日本漂流譚』より「ヤクーツクまでの道中支度」の図

イルクーツク

光太夫は、陸軍軍曹ワシレイらとともにオホーツクからヤクーツクに移動し、さらにイルクーツクへ向かった。厳しい寒さの中、皮の衣を着て、皮頭巾をかぶり、狐皮の袋に手を入れ、鼻から下を覆わないと耳や鼻が脱落し、頬はただれてしまう。昼夜キビツカというソリを使い、途中、官営の駅で馬を乗り替えた。1789年2月7日、イルクーツク到着。

10日後、庄蔵の膝から下が腐って、皮肉がただれ落ち骨が露わになった。医師が、のこぎりで膝の関節を切断し、焼酎をひたした木綿を傷口に巻いて煎じ薬を投与した。片足を失った庄蔵はキリスト教に改宗し、療養所に入った。

イルクーツクは、賑やかな町で、中国・朝鮮・満州などからも交易に訪れる。光太夫たちは、鍛冶屋に泊めてもらい、心安い知り合いも増えた。ある日、キリル・ラクスマンという人物を紹介された。キリルは陸軍中佐で、大学教授、17国の言語に通じ、様々な分野の学問に詳しかった。光太夫をひとかたならず親切に慈しみ、子弟のように憐れみ、長官に帰国願を出せるよう取りはからってくれた。

しかし、ロシア政府からは、帰国は思いとどまり仕官するよう申し渡された。1791年1月、光太夫は、キリルの勧めにより女帝に直訴するため都にのぼることを決意した。九右衛門が病死し、新蔵も熱病にかかり気遣わしかったが、1月15日、キリルとともにイルクーツクを出立した。ペテルブルグまで30日余りの旅だった。

皇帝

1791年5月1日、皇帝・エカテリーナ2世はツワルスコエ・セロという地の別荘に、皇太子をはじめ百官を引き連れて遷られた。5月8日、光太夫も同所へ赴き、同28日、陸軍元帥のウォロンツォフから、漂流人を連れて参るようキリルに命令が伝えられた。光太夫は、天にも昇る心地で、キリルに伴われ、白灰色のフランス仕立ての羅紗服で出かけた。

宮中の広間は、35m四方ほどで、赤と緑の大理石で飾られ、皇帝の左右には侍女が50人程控えていた。さらに、執政以下の官人400人程が2列に分かれて威儀堂々と並んでおり、気後れして進みかねていると、「御前の近くまで出よ」とうながされた。光太夫は毛織りの笠を左脇にはさみ、おじぎしようとしたが「すぐに進み出よ」と命じられたため、笠と杖を置いて、皇帝の前へにじり寄り、かねてから教えられたとおり左足を折り、右足のひざを立て、手を重ねて差し出せば、女帝は右手を伸ばして、指先を光太夫の手のひらの上にそっと乗せられた。光太夫は3度、皇帝の手に口をつけた。これが外国人としては初めての皇帝への拝謁の礼だったという。光太夫が退くと、皇帝は願状を取り出させてご覧になり、「ベンヤシコ」と声高に言われた。これは、「かわいそうに」という意味である。それから皇帝は、海上での艱苦や亡くなった者たちのことなどを質問され、詳しくお答え申しあげたところ、「オホ、ジャルコ」と仰せになった。これは死者を悼む言葉だった。

帰国許可

1791年9月29日、帰国の許可が伝えられた。10月20日、光太夫は宮中に召され、皇帝手ずから嗅煙草入を与えられた。11月8日、金牌1枚・時計1個・金貨150枚が渡された。金牌はメダリー(メダル)といって、純金製で、表にはエカテリーナ2世の肖像、裏にはピョートル大帝の像が彫られ、天蓋色の紐

で首に掛ける。格別の勲功のある平民に贈られるもので、これを持つ者は決して粗略に扱われない。時計はフランスの職人を招いて作らせた精巧なものだ。小市と磯吉には銀牌、帰国しない新蔵と庄蔵には金50枚が与えられた。11月26日にペテルブルグを出発し、23日イルクーツクに到着。

庄蔵

翌年5月20日、イルクーツクを発足。病院から庄蔵を呼び寄せていたが、出発は当日まで隠していた。間際になって暇乞いをされた庄蔵は、呆然となる。光太夫は、庄蔵の手を取り、「いま別れて、再び会えるとも思えない。死んで別れるのも同じだから、よくよくお互いの顔を見ておこう」と心をこめて離情を語り、ロシアの習慣で庄蔵の口を吸い、思いを振り切ってその場から駆けだした。庄蔵は不自由な足で立ち上がり、転んで大声をあげて小児のように泣いてもだえた。その声が耳に残って、腸を断たれるようだった。おなじ国内でしばしの別れでも、生き別れほど悲しいものはないのに、まして歳月の辛苦をしのぎ、生死を共にしてきた庄蔵が、不具の身になって仲間と別れ、異国に残ることであるから、その悲しみも道理である。

帰国

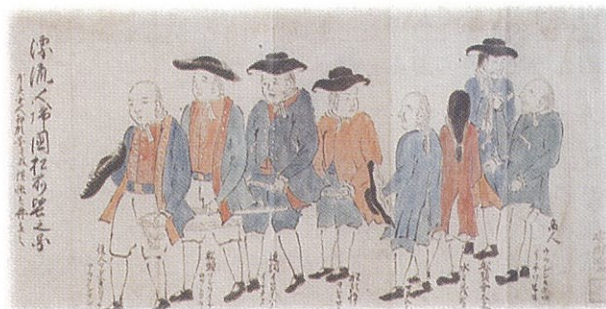
イルクーツクを出て、レナ川を船で下り、ヤクーツクに着岸。ヤクーツクから馬で天下第一の難路を越え、8月3日にオホーツク着。そこで遣日使節に選ばれたキリルの次男アダム・ラクスマンが待っていた。

8月21日、キリルがペテルブルグに帰ることになった。光太夫は、別れに臨んで親よりも深い恩義を受けたキリルの足を戴き、厚恩に感謝し、懇ろに別れを告げて涙を払って別れた。

9月13日、オホーツクを出帆。光太夫、磯吉、小市、アダム、ロフツォフ以下42人が船に乗り移れば、岸には送別の男女が雲霞のように押し寄せていた。3発の大砲を合図に艦綱が解かれると、船の人も陸の人も、別れの言葉を告げるたびに小銃を1発ずつ撃った。その夥しい銃声は例えようもない。

そして、ロシア暦1792年10月7日、蝦夷地根室に着岸。10月19日には、松前藩家臣の鈴木熊蔵と医師・加藤肩吾等が根室に着いた。11月5日、仮屋が落成したので乗組員は船から陸に上がり、同30日には、幕府の御小人目付・田草川伝次郎らが根室に着いた。

翌年4月2日、小市が病死。5月7日、光太夫らは根室を出帆し、6月8日に箱館に入津した。箱館では、大富豪・白鳥新三郎宅で入浴し、山海の珍味を集めた料理が出された。17日、アダム、光太夫ら14人と幕府の役人は馬駕籠で箱館を發ち、20日に松前に着。翌21日に江戸から派遣された御目付2人にアダムらが拝謁し、24日には光太夫・磯吉は御目付に引き渡された。



「漂流人帰国松前堅之図」箱館での光太夫一行の図

北槎聞略の編者・桂川甫周とは

桂川家は、初代甫筑（1661-1747）より代々幕府に仕えた奥御医師の家でした。奥医師は、官医、御典医などとも呼ばれ、將軍やその家族、幕府の高官などの診察を行うのがその役目でした。多くの場合「法眼」に叙せられ、供廻りを従えて駕籠で江戸城に登城することが許されていました。桂川家は、その中でもオランダ流の外科医の家系として特殊な地位を占めた家でした。

その4代目を継いだのが、桂川甫周国瑞（1751/54-1809）です。甫周は、桂川家の当主としてオランダ流の医学をおさめる一方で、世界地理・科学・言語などにも深い関心を抱き、隆盛期を迎えた蘭学の世界で中心的な存在となっていました。

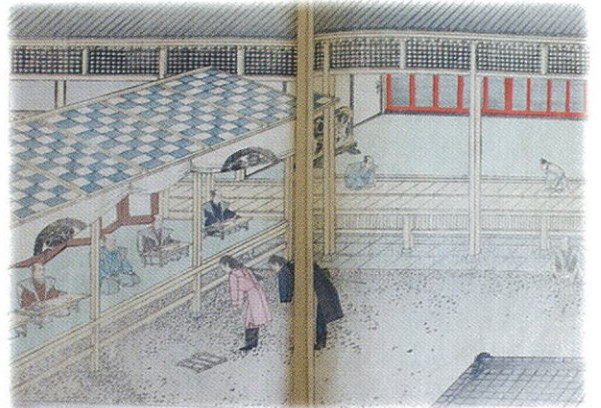
蘭学とは、オランダから輸入された洋書を通じて、西洋のあらゆるものを研究する学問です。医学はもちろん、化学・薬学・天文・物理などの自然科学や、砲術などの軍事技術、さらに歴史・地理・言語などの人文科学もその研究対象とされました。

甫周は、父甫三国訓（1730 - 1783）や前野良沢（1723 - 1803）から蘭学を学び、蘭学の勃興を促すこととなった『解体新書』の翻訳作業に当初から若くして参加するなど、早くからその才能を発揮しました。明和6年（1769）には奥御医師となり、寛政6年（1794）に幕府の医学館教授となりました。安永5年（1776）には、江戸へ来たオランダ商館付医師ツンベリーに師事してリンネの植物標本法や医学を学びました。日本で初めて顕微鏡を医学に用いたのも甫周です。そして、医師として『和蘭薬撰』『海上備要方』『和蘭袖珍方』など医学書の翻訳に携わり、弟子の宇田川玄隨にゴルテルの内科書を託して『西説内科撰要』を訳させたりもしました。

また、世界地理に強い関心を示した甫周は、『新製万国地球図説』『地球全図』などを翻訳し、寛政4年（1792）にロシアから大黒屋光太夫が帰国したという報せを受けると、ヒュブネルの地理学書（『ゼオガラヒ』）のオランダ語版から『魯西亜誌』を訳出します。そして、光太夫が江戸に送られ、江戸城吹上上覧所で將軍・家齊の上覧を受けた際には、その場に列席して、その時の問答を記録した「漂流御覧之記」を著しました。この「漂流御覧之記」は、またたくまに各地に広まり、大黒屋光太夫と桂川甫周の名を日本中に知らしめることになりました。

さらに、甫周は、大黒屋光太夫からロシア事情について詳しい聞き取りを行い、寛政6年に「北槎聞略」を完成します。光太夫の体験と甫周の分析が生み出したこの地理書は、江戸時代のロシア研究の最高峰と言われ、甫周の代表作ともなりました。甫周と光太夫の出会いによって生まれた「漂流御覧之記」「北槎聞略」のふたつの書物は、その後の漂流者の聞き取りや海外研究に大きな影響を与え、大槻玄沢「環海異聞」などに引き継がれていきます。

日本の医学の発展だけでなく、甫周の科学的な視線は、日本の地理学や北方研究の発展を導くことになりました。そして、甫周に生きた北方情報を提供した大黒屋光太夫の存在は、甫周の業績とともに語り継がれることになるのです。



大黒屋光太夫は、帰国後、江戸城で將軍・徳川家齊の上覧を受け、さまざまな質問に答えました。そのなかに「彼地にて、日本の事存居候哉」という質問がありました。光太夫は、「日本人にては、桂川甫周様・中川淳庵様と申す御方の御名をば、何れも存居申候」と答えています。蘭学者・桂川甫周の名は、交流のあったオランダ商館の関係者などを通じて、海を越え、西洋に広まっていたのです。

この図は、その將軍家齊に拝謁した時の様子を描いた図です。奥の赤い御簾の中で將軍が見守る中、ロシア服を着た光太夫の正面に桂川甫周が座し、さまざまな質問を投げかけました。ロシア帰りの光太夫の口から自分の名前が出た甫周は、さぞ驚き喜んだことでしょう。

將軍もこれを大いに喜び、大黒屋光太夫の経験を聞き取り書物としてまとめるよう桂川甫周に命じたといわれています。そして生まれたのが「北槎聞略」だったのです。



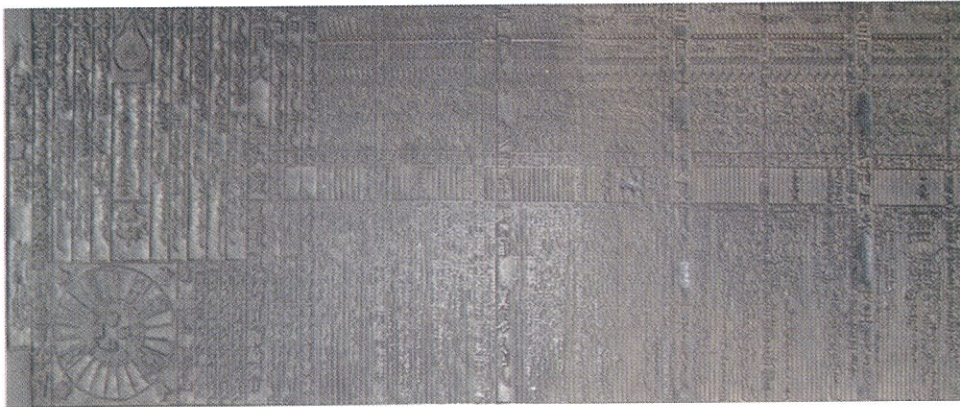
神奈川県伊勢原市の上行寺にある甫周の墓

「伊勢暦」のミニ展示コーナーを設置しました

江戸時代、この地方の廻船のほとんどは伊勢神宮の御札を納めた神棚を積んで航海していました。光太夫たちが乗っていた神昌丸にも、伊勢神宮の神棚が積んであり、光太夫たちはロシアでもそれを大切に持ち歩き、日本へ持ち帰って来ています。また、光太夫は、漂流中には伊勢神宮の御籤で陸との距離を占い、帰国から10年後に帰郷した際には伊勢神宮への参詣をとくに願ひ出るなど、伊勢神宮への信仰は厚いものがありました。この神宮への信仰心は、光太夫だけのものではなく、当時の人びとに共通するものでした。

今回展示した「伊勢暦」は、厚い信仰を受けた伊勢神宮の御札と共に、御師によって全国に配られた賦暦^{ふれき}です。吉凶凡例、月の大小、節季や農事に関する記述が記載されており、生活に密着した暦として大変便利だったために喜ばれ、大量に刷られたようです。江戸時代中期頃には、毎年約200万部が出版され、全国で配られた暦の約半数を占めていたともいわれています。また、数だけでなく種類も多く、献上暦といわれる大きくて上等な暦から、一般に配られていた簡素な暦まで様々なものが遺されています。

展示資料は、安政7年（3月に万延元年に改元）の「伊勢暦」とその版木です。版木は横浜市在住の椎橋文雄様からお借りしました。大量に配られた「伊勢暦」ですが、摺り終わり不要となったその版木は、表面を削られ別の版木へと再利用されたり、堅い丈夫な木で作られているため古材として火鉢や煙草盆などの材料へと転用されたりして、元の状態のまま遺されている例は少なく、大変珍しいものです。この機会に是非ご覧ください。



桂川甫周が参考にした「ゼオガラヒ」とは レプリカ展示
レプリカ原本：京都大学附属図書館

原題 Hubner, Johan

[Algemeene geographie, of beschryving des geheelen aardryks. Amsterdam, P.Meijer, 1769. 8vo. 6 vols.]

幕府の命を受けた蘭学者・桂川甫周は、光太夫からロシアの情報を聴取し、オランダから長崎に輸入された地理学書の情報と重ね合わせて『北槎聞略』に集大成しました。そのとき使用された主な地理学書がJ・ヒュブネル著『ゼオガラヒ (Geographie)』（6巻本、1761～66年、蘭訳1769年）でした。『ゼオガラヒ』は、桂川甫周のほかにも前野良沢、山村才助、馬場貞由ら初期の蘭学者が世界地理、とりわけロシア情報を得たことで知られています。

そうしてできた『北槎聞略』は、ロシアに関する地理・歴史・言語・習慣など、様々な事柄を網羅したもので、江戸時代のロシア情報の最高峰といわれています。『北槎聞略』は、大黒屋光太夫のロシア経験と『ゼオガラヒ』からの情報を桂川甫周がまとめることによって生まれたのです。



ロシアの章の冒頭ページ

亀井高孝 – 北槎聞略の再発見者 –

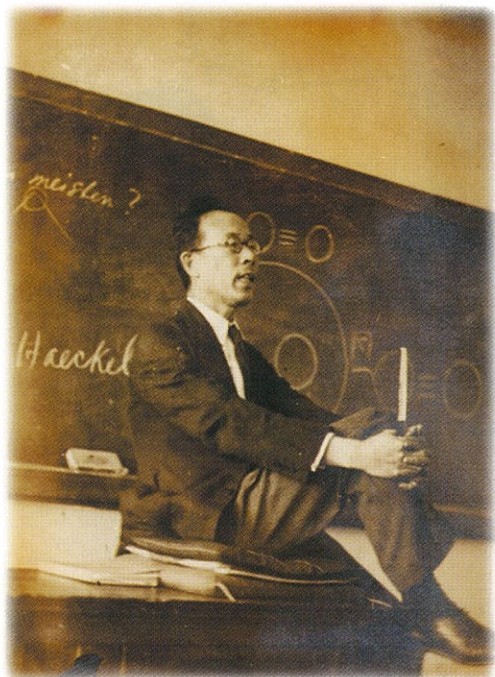
亀井高孝（明治22年（1886）～昭和52年（1977））は、旧名張藤堂家出身の藤堂高矩の次男として、山形県酒田で生まれました。しかし、4歳のとき父と死別し、名古屋で商家を営む亀井家の養子となります。その後、一家は上京し、亀井は東京府立第一中学校、第一高等学校を経て、東京帝国大学文科大学西洋史学科に学びました。大学卒業後は、東京府立第一中学校教諭、水戸高等学校教授などを歴任し、大正12年（1923）から第一高等学校教授となり、昭和24年（1949）からは清泉女子大学文学部教授を務めました。

亀井は、教員生活を送りながら、歴史学者（西洋史）として活躍しました。主著に『参考西洋歴史』（博文館 1920）『西洋人名事典』（岩波書店 1932）『東ローマ帝国史』（生活社 1948）などがあり、『標準世界史地図』『標準世界史年表』などは現在でも改訂を重ね、世界史を学ぶ高校生の副教材として愛用されています。

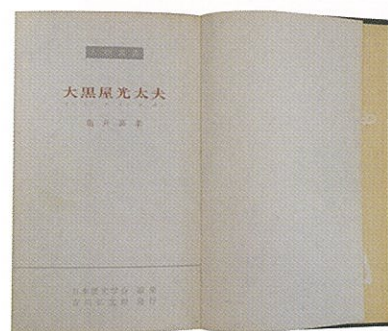
また、亀井は大黒屋光太夫に深い関心を寄せ、その研究に先鞭をつけた人物でもありました。光太夫を扱った主著には『北槎聞略』（三秀舎 1937）『北槎聞略』（亀井高孝・村井七郎 吉川弘文館 1965）『北槎聞略 大黒屋光太夫ロシア漂流記』（岩波文庫 1990）や『人物叢書 119 大黒屋光太夫』（吉川弘文館 1964）『光太夫の悲恋』（吉川弘文館 1967）などがあり、現在でも再版を重ね読み続けられている書籍も少なくありません。なかでも、それまでほとんど世に知られていなかった「北槎聞略」に価値を見出し、校訂・出版し、一般の人びとにも広く紹介したことは、亀井の大きな功績といえるでしょう。

そんな亀井高孝と「北槎聞略」との出会いは、1909年頃のことだったようです。当時一高教授であった亀井は、神田の和書専門店「北槎聞略」の写本を発見しました。江戸末期の書店・達磨屋の蔵書印があり、珍本として売らずに保存していたものでした。古書店で手に入れたその写本を元に内閣文庫（国立公文書館）の正本との校合を行った亀井は、昭和12年（1937）に三秀社の記念事業として「北槎聞略」を出版しました。この出版は戦前のことでもあり、戦災を免れて残された冊数も少なく、なかなか一般の手に渡るものではありませんでしたが、シベリア研究者の加藤九祚より本書を紹介された井上靖が「おろしや国酔夢譚」を執筆する際に唯一の基本資料とするなど、その影響は大きなものでした。そして、昭和40年（1965）には、三秀社版を改稿し吉川弘文館から再刊、版を重ねました。さらに、亀井の死後、平成2年（1990）には岩波文庫からも出版され、「北槎聞略」はより身近なものになりました。現在の私たちが「北槎聞略」を書店や図書館で容易に手にとることができるのは、亀井高孝のこれらの業績によるところが大きいのです。

また、亀井は古書の蒐集家としても知られており、光太夫の資料についても多く所蔵していたようです。それらのほとんどは火災で失われてしまいましたが、運よく被災を免れた資料のいくつかが鎌倉の旧亀井家に残されています。



『北槎聞略 大黒屋光太夫
ロシア漂流記』（亀井高孝校訂
岩波文庫 1990）



『人物叢書 119 大黒屋光太夫』
（亀井高孝 吉川弘文館 1964）

←教鞭をとる亀井高孝
（曾孫・小野光子氏提供）

ご利用案内

日本がロシアと初めて公式に外交交渉を行ったのは、ペリー来航より60年以上前、ロシア皇帝エカテリーナ2世によって派遣されたラクスマンが蝦夷地に来航したときでした。ラクスマンは、ロシアに漂流した伊勢白子の船頭・大黒屋光太夫らの送還を名目とし、日本との通商関係の樹立を目的としていました。

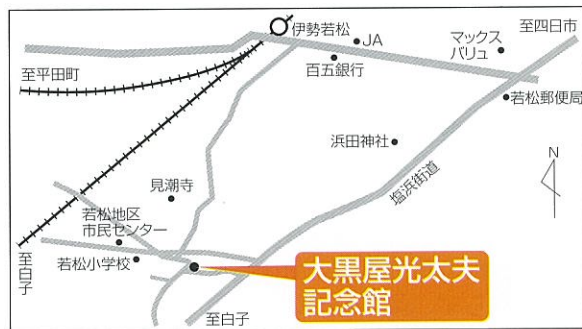
ラクスマンの来航によって、日本が国を開くことはありませんでしたが、ロシアの情報を吸収して帰還した大黒屋光太夫は、その後は江戸に留め置かれ、多くの政治家や蘭学者に注目されて、蘭学の発展に寄与し、世の中に大きな影響を与えました。

大黒屋光太夫記念館では、特別展・企画展を通して、さまざまな視点から光太夫について紹介しています。

〒510-0224 三重県鈴鹿市若松中一丁目1-8
 Tel & Fax 059-385-3797
<http://suzuka-bunka.jp/kodayu/>
<http://www.city.suzuka.lg.jp/life/shisetsu/9209.html>



開館時間 10:00 ~ 16:00
 休館日 月曜日(休日の場合は開館)・火曜日・第3水曜日
 年末年始(12月28日~1月4日)
 入館料 無料



アクセス

- 近鉄名古屋線急行利用 伊勢若松駅下車 徒歩15分
- 近鉄名古屋線特急利用 白子駅下車 タクシー利用10分
- *東京・名古屋方面から：名古屋駅で近鉄名古屋線に乗り換えてください
 名古屋駅→近鉄特急(40分)→白子駅→タクシー
 名古屋駅→近鉄急行(46分)→伊勢若松駅→徒歩
- *大阪方面から：近鉄特急が便利です
 難波駅→近鉄特急(1時間45分)→白子駅→タクシー
 難波駅→近鉄特急(1時間45分)→白子駅→近鉄急行(3分)→伊勢若松駅→徒歩

☆自家用車のナビで「大黒屋光太夫記念館」が検索されない場合、「若松小学校」を目的地にされると便利です。若松小学校の正門前が記念館です。



大黒屋光太夫記念館のホームページが新しくなりました

大黒屋光太夫記念館

検索

<http://www.suzuka-bunka.jp/kodayu>

*大黒屋光太夫記念館を所管する鈴鹿市文化振興部文化課は28年4月1日より鈴鹿市文化スポーツ部文化財課になりました。

ダイ・コー 大黒屋光太夫 記念館だより

三重県鈴鹿市神戸一丁目18-18
 鈴鹿市文化スポーツ部文化財課

Tel.059-382-9031 Fax059-382-9071

<http://suzuka-bunka.jp/kodayu>

鈴鹿市若松中1丁目1-8

大黒屋光太夫記念館